



水中花

目次

✿水中花✿

✿序：有り得なかった夢	3
✿橘咲杏	4
✿玖堂咲姫	10
✿終：君の開く世界	17

✿水中花✿

※序：有り得なかった夢

^{たちばな}橘 咲杏は、妹の^{トウカ}桃花を守るために一人で悪魔の城に出された。わずか十三歳で親元を離され、悪魔以外に会うことは許されなくなった。

二つ下の桃花は、咲杏と違って、人間だった父の血を多くひいている。魔性の狐の血をひく母と、悪魔の因を持つ父から生まれた咲杏は、母にそっくりな^{あか}魔性の紅——桜色の髪と目を持って生まれた。私は魔物だから、と必死の決意で悪魔の教育を受けて過ごした。咲杏が悪魔の仕事を受けば、桃花は人として幸せに暮らせることを願って。

無愛想な父と同じ黒い髪と目で、幼い頃から人見知りの桃花。人ならぬ「力」をほとんど持たない妹が、小さい時から咲杏は大事で可愛かった。大人しい桃花は、今でも両親と平和な世界で暮らしていると思っていたのに——

「母さん……どうし、て……？」

両目が^{くら}眩んだ。常に薄暗いはずの悪魔の城が、真っ白になったような気がした。

いったい、どうして。どうして今、冷たい石の床に座り込んだ咲杏の前には、大切な桃花が倒れているのだろう。うつ伏せに倒れた胸の下から、じわりと辺りに、真っ赤な血の花を咲かせて。

「どうして……トウカ……——」

まず、どうして、妹が悪魔の城にいるのか。そして何故、咲杏の視界が開けたその時、目の前に倒れているのだろうか。既に呼吸は完全に絶えて、見るも明らかな屍の姿で。

✿橘咲杏

咲杏の母は、妖精の里で生まれた妖狐だという。妖精とは、妖^{あやかし}の傾向を持つ自然の精霊で、人ならぬ力を持つヒト——^{せんぞく}千族が溢れる宝界でも変わった種族だと言われる。

妖精の誰かが、心から愛する者と体の契りを行った時、低い確率で妖精の里の世界樹に妖精の卵になる。それを^{かえ}孵せるのは血縁者だけで、そんなことを知らない魔族の狐と、妖でない自然霊の力をひく母は、母も生まれられなかったはずだった。そもそもどうして、妖精の娘ではない母が妖狐として卵に宿ったのか、咲杏達には何も教えられていなかった。

咲杏も、妹の桃花も、卵から産まれた妖精ではない。一応父と同じ、化け物の力を使える人間として生を受けた。父は遥かに遠い昔には人間で、その後に何やら適性で「神」を降ろし、悪魔にもなってしまったらしい。

妖精の里で育った母は、基本人見知りで大人しいかと思えば、時に大胆な奔放さを持ち、妖精とはそうして気ままな生き物だときいた。

咲杏の一家は、母の本家という「竜宮」で育った。誰もいない無人の島で、大事な神域なので両親が守っているのだ。父はやがて、そこから異世界に通じる「橘診療所」を開き、日本という地に住む^{いとこ}従姉兄達にも咲杏は簡単に会えるようになった。咲杏も将来その地に行く、と、読み書きや常識は竜宮よりも、日本のことについて習って育っていた。

このまま、いつかは、従姉兄達の所へ行ける。そう思っていた咲杏を、ある日に母——
凧は、妖精の里に行くと言って不意に連れ出していた。

「ねえ、サクラ。サクラは、トウカが大事？」

「？」

妖精の里には、咲杏と桃花、母の三人で行った。ところが母は、その里に桃花を置き去りにすると言い出し、理由は何も伝えようとしなない。

「トウカはここにいなきゃ、大事なヒトに出会えないの。そしてサクラ……サクラは、トウカを助けるために、行ってほしいところがある」

大人しい桃花は、何の抵抗もせずに妖精の里入りを受け入れてしまった。何が起きているのかわからないのは、咲杏一人だと言わんばかりに。

「ねえ、サクラ……これはサクラにしか、できないことなの……」

悪意の全くない澄んだ声で、天使のように微笑んだ母。まるで突然、知らないヒトになってしまったように。

そうして咲杏は、大きな監獄を司る悪魔の住処、四天王の城の一つに預けられた。日本のある異世界とは全然違う、文明の未発達なこの世界において、そこは現在、最大の「水」の力を学べる所と言われて。

一応人間のものというこの世界の中では、四天王の居城は、悪魔の巣とはいふものの比較的穏やかな留学先だった。咲杏の面倒をみるよう申し付けられたという四天王の妹姫は、いつもおろおろと、咲杏のことを心配しながら快適に暮らせるようにはからってくれた。

「かわいそう、貴女……悪魔の子供だから、捨てられたのね。安心してね、ここはきっと、貴女にはとても良い家になるから」

捨てられたわけじゃないんだけどなー、と。誤解を解こうとしても、世間知らずの妹姫は、「かわいそう、強がってる……」と受け取ってしまう。咲杏はあくまで、強くなるためにこの城に行くことを受け入れたのに。

幼少から咲杏は、神域の竜宮で鍛えられて育った。桃花より強い咲杏だから、どちらかが悪魔の城に行くのならば、それは自分だと選んだのだ。

「……大丈夫。わたしは、悪魔になってもいいんだから」

母は今後、竜宮を維持するために、強い「水」の力が必要だと言った。それは本来、母と同じ竜宮の巫女の証を持つという桃花の役目なのだが、母は巫女でなく悪魔として竜宮を守っていて、後継者は咲杏だと言った。

「お母さんは、悪魔になった巫女の狐。巫女は、自分のためには生きられないから……そんなことを、桃花にはさせたくないもの」

母の母が、竜宮を守る自然霊の巫女だったらしい。竜宮を守るのは本来母の姉の役目なのだが、色々あってその伯母は、従姉兄達を引き連れて人間界の日本に引っ越していった。それも母の望みだという。

「悪魔なら、自分のために生きてもいい。だからお母さんも、悪魔なんだって……わたしは強くなって、お家を守りながら、龍斗達にまた会おうの」

咲杏は何も知らなかった。母は、^{あか}紅い「魔」ではあるが、悪魔ではなかったこと。悪魔が「力」ある者の野心の果てなら、「魔」は根付いた「力」に縛られる未練の塊であるということ。

咲杏が悪魔に預けられたことを、母以外は誰も知らず、従姉兄達は咲杏を助けに来ようとして、母に力と記憶を封じられた。そんな辛い話も全て、後から「彼女」に教えられる。

異変の始まりは、ヒトの少ない悪魔の城に、魔王からの使者という娘達が新たに棲み始めてからだった。

「んにー。あなたが、最有力の次代北方四天王候補ですのニ？」

「……え??」

黒い猫耳と鈴のついた首輪、体をぴったりと包む黒装束の猫娘が、初めて咲杏の側近として付いた。十五歳の終わりに近づいた咲杏より、二つほど年下の猫娘は、「ミスト」と名乗った。咲杏がきいたこともない話を、次々と楽しげに言う。

「魔王様は、強ければ誰でも四天王になっていいって！　ミィは応援しますのニ、悪い人間をミィと一緒に、ここで裁いていくのが役目ですのニ」

世界の監獄。「水」の四天王城の有力な後継ぎ。怖かったのは、そんな寝耳に水の話だけではない。

自身を「ミィ」と呼ぶミストは、日がな一日、自らの工房にこもっていた。魔法の武器や道具を造る専門家だというのが、大きな紫苑色の目には、人形のような空ろさしか宿っていない。

「ミスト……あのね。ミストはどうして……魔王様の部下になったの？」

「——？」

せっかく自分と、近い歳の友達ができた。工房を毎日訪ねる咲杏に、ミストは「仕事」の兵器を造りながら、「役目」については軽快に言う。

「ミィもヴァシュカも、『水』の器ですのニ。ここはぴったりのお仕事場ですのニ？」

ヴァシュカ。咲杏が四天王の城に来て与えられた、悪魔としての名前だ。悪魔は基本、真の名は隠すものらしい。「ミスト」も略名だという。

ヴァシュカは洗うこと、川、などの象意がある名。ミストは「霧」だ。

役目についてはすぐ答えるのに、ここで仕事がしたいのか、ときくと、ミストはいつも笑顔のままで固まってしまった。それはさも、疑問を持つことすら許されずに、己の心を霧に隠してしまったように。

「自分のこと、何も教えてくれないよね、ミスト……何か、自分でも、自分の気持ちがわかってないみたい？」

朗らかに変わった口調をするミスト。目が常に空ろであるのは、人間にそっくりの精巧な人形の体であるからだど、後に知った。それならこれ以上ミストは歳を取らない。数多の道具や武器を造るミストが、ミスト自身も作り物であること……もっと話したい、と思いつつも、咲杏の胸には棘とげのような悪い予感が消えなくなっていた。

「わたしのことも……ミストみたいにしようと、みんな思ってる……？」

その頃の咲香が、悪魔は人の魂を奪う者と、知っていたわけではない。けれど四天王の言うがままに、大量殺戮兵器を造るミストを見てしまった。

普段のミストは、何処か上の空でありながら、咲香が一人でいると心配げに駆け寄ってくる。大丈夫、淋しくないよ、私がいるよ、と、一度だけ普通の口調で言ってくれたことがあった。優しいヒトなんだ、そう伝わってくるのに、何も疑問を持たずにヒト殺しの道具をどんどん造っていく。

悪魔に魂を奪われた娘。それをこの頃に知れていたら、ミストのことも助けられたかもしれない。咲香はこれから、何度も思い返すことになる。

十六歳になった咲香は、ある日、ミストと共に北方四天王に呼び出された。これまで四天王から与えられた課題はほとんどクリアし、すっかり熟練の「水」使いになった頃だった。

見た目は優雅な貴族のような長髪の四天王は、ミストに古代の発掘品という赤い胸当てを渡し、隣にいる咲香と二人まとめて説明をした。

「この鎧に填まる黒の珠玉が、我が城の切り札となる『^{とうかすい}桃花水』です。君にはこの秘宝を使いこなしてもらいます、ヴァシュカ」

「桃花水」。咲香は一瞬、気が遠くなりそうだった。偶然にしては、あまりにできすぎている秘宝——何故、妹の桃花と近い名前なのか。

「ミストは補佐を。ヴァシュカに合うよう、秘宝を造り直して下さい」

渡された胸当ては発掘品の一部で、工房にはその鎧——古代の伝説の少女、「オセロット・アーク」の遺品が、一式届いていた。一カ月以内に何か結果を出すように言われ、ミストは張り切っていたが、咲香の胸騒ぎはいよいよ本格的になった。

オセロット・アークは、絵本になっている有名な少女だ。化け物の国に生まれた人間の逸話で、化け物に扮して化け物のために戦ったとされる。

「『桃花水』、確かに、どうしてこの珠玉だけジパング語ですのニ？　ヴァシュカの故郷も、確かジパング語圏でしたのニ？」

「う、うん……何か変だよ、この鎧、やっぱり……」

色んな道具を造れるミストは、古今東西の世界の知識が半端ない。冷静に秘宝を鑑定していたが、やがて、変化を始めたのはミストだった。

「桃花水」とは、雪どけ水を体現した、激しい水流の「力」だという。その真っ黒な珠玉は何と、竜宮が出所のはず、とミストが言い出していた。

咲香の故郷は、悪魔達には明かされていない。それなのに竜宮と、こんな所で話が繋がってしまった。咲香も知らなかったのだが、竜宮とは、滅びた最強の種族である「竜」の発生地、王者が持つ秘宝の一つが「桃花水」なのだとミストが調べ上げた。

「でも、おかしいんですのニ。もういない『竜』の宝なんて、普通はこの世には残らない

はずですのニ」

だから誰か、まだ宝の適合者が存命しているはずだと。ミストにそう言われて、咲香は震えた。母が咲香をこの城に預けた理由が、本当に桃花のため——桃花こそが「桃花水」の適合者で、遠ざけるためだとしたら。

「やっぱり、わたしが……わたしがこれを、何とかしないと」

これはサクラにしか、できないことなの。母の声を今も覚えている。

ミスト曰く、黒の珠玉が持つ力はとてつもなく大きい。制御に失敗すれば、術者は死ぬと注意された。本当に咲香にそれをさせていいのか、ミスト自身が無意識に迷いを持ち始めていた。

だからきっと、ミストは咲香より先に、その少女に出会ったのだろう。

「——え？　アークちゃんは、ずっとここにいるの……？」

工房の中で、ミストが独り言を度々口にするようになった。黒の珠玉が填まる胸当てを前に、どう細工しようかにらめっこをしながら。

「ずっと、独りなの？　それならこっちにおいて……私が、アークちゃんの水の器を作ってあげる」

ミストが普通の言葉で喋っている。そのことに自分で気付いていない。

誰と話しているのかきくと、ミストは珍しく自然に微笑み、憧れのオセロット・アーク、と、その時も普通口調で答えたのだった。

わけがわからなかった。靈感の類は持ち合わせない咲香は、古代のオセロット・アークの鎧の珠玉に、アーク本人が宿していると言われてもぴんと来ない。人形に宿る壊れた魂のミストは、だからこそアークを感じられるのだろうか。珠玉と話している時だけは、ミストが普通の娘に戻る。

普段は仕事の早いミストが、何かにつけて言い訳をして、「桃花水」の起動実験を遅らせ始めた。けれど咲香への接し方は以前のままで、ミスト自身が、自分のしていることをどうしてもわかってくれない。

「どうしよう……ミスト、『桃花水』を使うなって、言ってる……？」

それしか考えられなかった。咲香に「桃花水」を、起動させてはいけない。けれど悪魔に都合の良い魂にされた今のミストは、その躊躇い^{ためら}を自覚できない。これではミストの立場が悪くなる一方なのに。

日に日に、ミストの精神状態が不安定になり始めた。ちょうど同時期に、ミストは生き別れになった、双子の弟に再会したこともあるらしい。それが弟だと覚えていないのに、壊れた魂は望郷の悲鳴をあげた。

ミストがやつれて、それでも「まだ鎧の調整ができない」と、咲香を守ろうとするの

が辛くなった。まさかその時、ミストの双子の弟と仲間が、ミストを助けに四天王城に乗り込む計画を立てていたこと——そこに、咲香を助けたいと、十五歳になった桃花まで加わっていることを知る由もなかった。

これ以上ミストに負担をかけないために、咲香はさっさと、「桃花水」の制御をやり遂げてみせると、独断で動くことを決めた日だった。

そうして、独力で「桃花水」と己の接続を試した直後——

目覚めた時には、真下に桃花の冷たい屍が転がっているなど。そんな未来を知るはずもないまま。

※玖堂咲姫

優雅な北方四天王の妹姫は、四天王たる兄に可愛がられ、たいそう世間知らずだった。それでも「彼女」に、大事なことを教えてくれた。

妹姫は言った——きっと、人世を優しく動かすのは、泥を被る覚悟のある花なのだ。

橘咲杳の意識が、「桃花水」の内へと侵入してきた。この時を「玖堂咲姫」は待ち続けていた。

咲杳の本体はもう、「桃花水」の力の逆流で心臓が止まっただろう。だから桃花は四天王の城に仲間と共に乗り込み、ミストも必死に「桃花水」の起動を止めていたのに、咲杳はやはりここに来てしまった。

冷たく真っ暗な「桃花水」の水底。そこにぽつんと、一輪の花のように浮かぶ桜色の人影。

夢現で呆然としている咲杳に、白猫の姿しかとれない咲姫は、わぁんと飛びついていった。

「良かった、会えて嬉しい、咲杳！ やっと私に気付いてくれた！」

「.....え？ あなた、誰？」

咲杳が驚くのは無理もなかった。玖堂咲姫なんて本当はこの世界にはなく、それは白猫がある反則で具現した存在なのだ。

「私はあなた！ もう一度龍斗達に会うために、ずっとあなたを探してたの！ 私が宿れる器はもう咲杳だけで、だから咲杳も、私を連れて生まれてくれたんだから.....！」

白猫に飛び付かれて、尻餅をついた咲杳が、よくわからない顔のままとりあえず白猫を撫でてくれる。「龍斗」は咲杳の大事な従兄の名だから、それを知る白猫は敵ではないと感じたのだろう。

「えっと.....あなたは、わたしと、一緒にいてくれたの？」

「そう、一緒にいたの！ ここでのあなたには猫の縁がないから、どうしても私、人世に姿を出せなかったけど.....」

咲香は妖狐と、悪魔になった人間の長女だ。まだしも「獣」を従える力の持ち主であれば、猫の使い魔として咲姫を具現できたかもしれない。しかし今の咲香には、両親共に「水」属性だった以外の強い力がない。

だから実は、咲香には「桃花水」が使えてしまう。それをあえて止めた白猫には、とても大事な理由があった。

「あのね、咲香。『桃花水』を、制御しちゃダメ。それをすると、『桃花水』の適合者が咲香に変わって、前の適合者の魂が消えてしまうの」

「……え？」

「『桃花水』を使えば、今度は咲香が囚^{とら}われてしまう。私はかつて、ここに消えたあなたをずっと探した。その頃のことはもう覚えてないけど、凧さんは私の存在を夢で知った。私をあなたと引き合わせたのは、凧さん」

そしてもう一つ。白猫が何とか姿を顕^{あらわ}せる、この珠玉にいた大事な理由も伝える。

「今、桃花水に在^{いにしえ}る古の適合者……アークを消さないであげて。アークはずっと待っているの……いつか、『桃花水』に囚^{とら}われた自分に、きっと誰かが気付いてくれるって」

妖狐の凧には、遠い昔から、夢で過去や未来を知る呪いがあった。それは凧の姉から流れてくる力で、力の本体である姉は予知夢を見る自分を遮断できるが、凧はひたすら運命の因果を見続けてしまった。

その夢はこの世界の過去や未来だけでなく、凧が本来在^{ほんとう}るはずだった、「真実の世界」に居る白猫すら引き当てたのだ。

そこまで咲香に説明はしない。白猫自身、凧の「力」が視える特殊な眼を持つために、「凧がそう考える白猫と咲香の関係」を知ったに過ぎないからだ。

白猫にとって重要なのは、凧に引き合わされた大事な咲香が、望み通り従姉兄達の所に帰れることで。

「私は咲香に、色んなことを教えてあげるの。一緒に歌って、人間の世界で踊る仕事で、龍斗達と楽しく生きられるんだよ」

「えっ……そんな……そんなこと、わたし、できるの？」

「できるよ！ ちょっと反則だけど、こうして会えたから、私は咲香のそばにいられるようにできる。咲香が持ってる『狐』の血を、ちょっと猫に改めるだけでいいの」

「えっ……でも……じゃあ、竜宮は、どうなるの……？」

桃花の代わりに竜宮を守る。その決意で「水」の力を鍛えてきた咲香には、確かに一つ、残酷な話があった。

「……あのね、咲香。凧さんは、咲香にずっと、嘘をついてる」

「——」

「竜宮はもう、『橘診療所』をくさびに、凧さんが封じてしまった。咲香や桃花に、竜宮を守らせる気なんてないの。もう二人に、帰る所はなくて……凧さんは咲香にここで、『桃花水』に触れてほしかったの」

それは一つは、白猫と咲香を会わせるため。咲香が入れる「力」の場は他になく、「力」の一種である白猫はここでなければ咲香に会えない。

もう一つはこれから、咲香が直面する厳しい現実。今はあえて、どちらの理由も咲香に告げない。ここで咲香の心を折ってしまえば、凧も咲香も、そして桃花にも絶望が待ち受けている。

「——どうする？ このままでいれば、『桃花水』に拒絶されたあなたは死ぬ。でも私を受け入れてくれば、あなたに新しい『心眼』の力をつけて、現世に返してあげる」

咲香がきょとん、と白猫を見つめた。

「水」の使い手としても咲香は相当に強い術者となったが、それだけでは足りなかった。唯一この白猫の器になれる咲香には、もっと大きな無二の適性がある。

玖堂咲姫。それが凧に教えられた、白猫の名前だ。凧は白猫も咲香も、その名の方が幸せになれると言った。

凧が見たのは、凧がない世界で、凧以外から生まれた咲香——咲姫の行く末。

辛い思いは沢山するが、龍斗達にしっかり出会う。「心眼」——「力」に満たされるヒトの心を視て「力」に介入し、不滅とされる「力」を改変できる業を、「玖堂咲姫」は自力で習得する。

「私はあなたを、『狐』から『猫』に変える。あなたの心はそれでちょっと変わっちゃうけど、狐と猫は近いから大したことないと思う。そうすればあなたは、私の眼が使えるようになるの」

「.....あなたの眼？」

「あんまりしないけど、わりと、『力』あるヒト相手なら何でもできるよ。龍斗にも零那にも勝てる。『力』の形を根本からいじると、相手が別人になっちゃうから、よっぽどでないとしらないけどね」

咲香が白猫を受け入れれば、妖狐の素因がネコマタに変わる程度だ。どの道既に魔性のものであり、そしてこれから残酷な運命に出会う咲香は、悪魔になる道は避けられないだろう。

それでもせめて、せっかく生まれてきた人世を楽しめるように。

白猫もずっと、一つだけ欲しいものがあつた。それを咲香は持っているから、たとえ悪魔になる相手でも、咲香という器に降りたかった。

「.....あのね。私——『玖堂咲姫』には、家族がないの」

「.....え？」

凧が見ていた世界ではそうだ。玖堂咲姫は養子としての名前で、天涯孤独の身で咲姫は養親に拾われる。

だから、「^{ほんとう}真実の世界」の咲姫も咲香を繋ぎとめる。向こうには咲香が存在しないのに、ここでの白猫と同じように、いないはずのものを、どちらの世界も両方存在させる。

「私達は、世を狂わせる反則の造花。互いの欲しいもののために、互いを視つける」

「.....」

「私があなただを。あなたが私を視つけるから、どちらも存在する。それがこの『力』の本質で、無色でいなければいけなかった反則。でも.....」

白猫の白は、元は無色の白だった。それでも「彼女」は、もう一度会いたい相手に出会ってしまった。

「.....帰ろう、咲杏。龍斗がずっと、探してるよ」

この二人共の望みが、咲杏を悪魔で留めることを白猫は願う。

大きな白猫が掲げた白い前足を、咲杏はわけがわからないまま、おそるおそる小さな手で掴んだ。それはきっと、ここで死ぬわけにはいかない——そんな人としての想いだっただろう。

そうして、「桃花水」の逆流を、本来管理者である橘桃花が引き受けること。咲杏を迎えに四天王の城に乗り込んだ桃花が、仲間の護衛も空しく、冷たい屍となった姿を。橘咲杏——玖堂咲姫は、目の当たりにした。

両目が眩んだ。常に薄暗いはずの悪魔の城が、真っ白になったような気がした。

「母さん.....どうし、て.....？」

どうして、冷たい石の床に座り込んだ咲杏の前に、大切な桃花が倒れているのだろう。うつ伏せに倒れた胸の下から、じわりと辺りに、真っ赤な血の花を咲かせて。

「どうして.....トウカ.....——」

まず、どうして、妹が悪魔の城にいるのか。それを本当は、白猫——咲姫は知っていた。

凧は咲杏に守らせようとしたが、桃花はいつか必ず、「桃花水」のためにこの城に来てしまうことを。

いやああああ、と。ミストの絶望の悲鳴で、「彼女」はハッと我に返った。

場にいるほとんどの者が、彼女とは違う真っ暗な場所にいる。ここが白く視えているのは、彼女が白猫から受け取った「心眼」の作用だった。

霧に包まれたような世界で、ミストが必死に一人で逃げていた。壊れた魂の底に眠る、失った家族に追いかけて。

「知らない、知らない.....！ 私は知らない、アナタなんて.....！」

「力」模様が同じなので、ミストを追いかける少年は双子だとすぐにわかった。同じ紫苑色の髪と、蒼い目をした武装の少年。

「.....私のこと.....置いて出ていっちゃったアナタにはわからないよ！」

助けたかったが、ミストはすぐに霧の中に消えてしまった。今の「彼女」は、まず桃花を何とかしなければいけない。倒れている妹を泣きそうな思いで抱き上げた時、ふっと、後ろから彼女の首に槍が突き付けられた。

「.....何をしているんですか、ヴァシュカ」

背後には、最早殺気しか見せない北方四天王が立っている。その心にはおそらく、この城に異物を誘い込んだ、咲杏への激しい失望があった。

「その娘は君の仲間ですか。この落とし前はどうかどうつけるつもりでしょう」

「.....——」

城はあちこち、桃花の仲間達が派手に壊して、『桃花水』の埋まる鎧も主を失って力無く転がっている。咲杏に直接責任がないことでも、大事な城や秘宝を荒らされた四天王の怒りは理解できた。

それでも彼女は、早くここから桃花を連れ出し、誰かに助けてもらわなければいけない。それには今まで、「力」を鍛えてくれた四天王を恩知らずにも倒さなければいけない。

簡単に勝てる相手ではない。けれど今の彼女は、「力」以外に大した攻撃手段を持たない今代の四天王なら、勝算を探すことはできる。

いっそこで、自分の手で四天王を害せば、彼女は潔く悪魔に成り切れただろう。何の恨みもない相手でも、邪魔なら蹴散らすしかない。

ところがそこに、彼女を最後の谷底に落す、夢見がちな魔物が現れてしまったのだった。

「——あら。貴男のせいで、あたしの娘が一人、死んだというのに..... 貴男はまだ、サクラを自分のものだと思っているの？」

「.....！」

北方四天王の顔色が変わる。彼女に突き付けた槍を下ろし、声の方向に同時に振り返った。

そこにいたのは、竜宮の錫杖を手にした、竜宮を守るための巫女。

そのはずが、何故か紅い髪を空色に変えた、知らない姿の凧が佇み、錫杖を北方四天王に向けて優しく微笑んでいた。

「お母.....さん.....？」

思わず桃花を抱きしめながら、違う、と咄嗟に彼女は思った。

凧の「力」模様がおかしい。気配は以前通りの凧なのに、髪の色が青く視えているのも、きっと今の彼女の眼故だ。気配は同じであるということは、凧は前からこの姿で、それが誰にも視えていなかったのだと気付く。

「サクラをあたしに返す代わりに、ここにいる全ての異物の排除を請いなさい。そうすればみんな、あたしがまるごと追い出してあげる」

くすくす、と笑う凧は本気だった。彼女が何か言う隙もなく、四天王はその取引を受け入れ、彼女の周囲は眩い光に包まれていった。

ただ、後継ぎ候補として咲杏を引き受け、「桃花水」を使わせてみようとしただけの四天王には、その夜は大きな災難だったろう。凧はいつそんな「力」を手にしたのか、四天王城の気まると共に干渉し、乗り込んできた者達を本当に全て転位させてしまった。

そんな大きな「力」は当然、術者の身を削る。彼女が気が付いた時には、父のいる橘診療所のベッドで、久しぶりの父が痛々しい顔で彼女を覗き込んでいたのだった。

「お父さん、桃花は……!？」

部屋には二つ、ベッドがあった。一つは彼女が、もう一つには空色の髪の凧が寝かされている。しかし一番重症のはずの、桃花の姿はなかった。

「……苦労をかけた、咲杏」

父はただ、それしか言わなかった。それもそのはず、彼女が抱き締めていた時、最早桃花に命の気配はなかった。凧も「娘が一人、死んだ」と言ったのだから、両親にとって、桃花はもう失い存在になっているのだ。

——どうして。彼女がいくら泣いても、誰も答を教えてくれなかった。

咲杏が四天王に預けられた本当の理由。桃花が死んでしまった真相。母はいったいどうなったのか、果たして正気であるのか。

その後、それらの事情の片鱗を話してくれたのは——やがて彼女の隣で目覚めた、空色の髪の「巫女」だった。

「えっ……嘘……——」

重い目を開けた時に、そこに眠るのは完全に凧ではなくなっていた。髪の色は伯母のような空色、目は従兄と同じ深い青で。

「……ごめんなさい、サクラ。母さんに無理をさせたのは、わたしなの」

「嘘……桃、花……?」

形はほとんど、凧であるまま、伯母のような姿になった誰か。

ところがその声は紛れもなく、彼女を助けにきたはずの妹のもの。

「『桃花』はもういない。トウカの器で、助けないといけないヒトがいるの……でも、サクラを傷付けるつもりはなかった。ごめんなさい……」

父はその、凧だったはずの相手を、「流惟」と呼んだ。

「力」模様は、凧とも桃花とも違う。しかし元々、桃花に大した「力」はなかった。今、流惟に視える「力」は、確かに竜宮を守る巫女のもの。

本質が妖狐である凧は、竜宮の巫女としては邪道だった。けれど今の「流惟」は、完

全に竜宮と同じ雰囲気の「力」に視える。

「お父さんも、お母さんも……こうなることを、知ってたの……？」

桃花は死んだ。流惟曰く、それで今後、誰かを助けるために。

桃花が秘めていた「巫女」の「力」を、凧は奪ったという。その「力」づてに、桃花を凧という器で無理やり生かすために。

その時にはまだ、彼女にはわからないことだらけだった。流惟は、今は桃花の望みを叶えられない、その時期じゃない、としか教えなかった。

やがて彼女が知ったのは、四天王の城で、ミストもあの時壊されてしまったこと。けれどミストは、「桃花水」から真の主のアークを引き挙げた。そして桃花が助けたかったのは、そのアークであること。

十五年後に、回復して保存されていた桃花の器を依代として、猫羽という少女が人世に戻ってくる。それがオセロット・アークであったのだと、答え合わせができる前に、彼女は両親とほとんど関わりを断ってしまった。

家族がほしい。白猫の望みは、果たして叶ったと言えるのだろうか。

彼女は長い間、それを自らに問いかけていくことになる。

※終：君の開く世界

玖堂咲姫。橘咲杏の名は捨てて、彼女は人間界で従姉達と再会した。

橘桃花が死んだ真相を知りたい、と言った従姉は、吐き捨てるような溜め息をついて、彼女の話をして聞いてくれた。

「——結局、悪魔の所業だな。古代のアークをどうにか復活させるために、誰もが歪みまくったって話じゃないか」

「ごめんね、零。でも私、猫羽ちゃんがこの世に戻れて、ほんとに良かったって今では思ってるよ？」

橘桃花は、アークを探し続ける未練の元に在った魔物だった。それを「玖堂咲姫」の白猫は知っていた。桃花は元々、アークのために死ぬことを望み、生きていたようなものだ、と。

凧はただ、桃花が望むアークも、桃花自身もこの世に残したかったのだ。今の彼女なら母の気持ちがわかる。

「ルイの言う通り、サクラを巻き込む必要はなかつた。結局アークを視つけたのもカザリだろう、その話じゃ」

ミストはあれから双子の頑張りで、長い年月の後に、猫羽を守る新たな依代とカザリの名を得ている。それがまた違う事件を呼ぶのを、凧の残滓に後日に教えられる。

「彼女」は本当に、いったい何だったんだろう、と時々思う。それもそのはず、彼女の「心眼」を使ってしまえば、ややこしい事変を経なくてもアークやミストは助けられた。

けれどその道はおそらく、凧が防いだのだ。

「うーん。お母さんは、私の力を目覚めさせたかったんじゃないかな。でも私に、その力で何もしてほしくなかった。そんなところだと思う」

「何だそれ。あの女狐いい加減、行動原理がややこしすぎるぞ」

「多分、反則だから。反則をするのは自分だけでいいって、お母さんは思ってるよ」

何だそれ、と従姉がまた不服そうに言う。そうだね、と彼女も笑った。

「桃花水」の淵で咲いた、反則の造花。凧は、「玖堂咲姫」を望んだのだ。それがたとえ、有り得なかった夢を壊せない、優しい作り物であっても。

水中花

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
